

先輩や仲間の取り組みを通し 学び方を自ら見直し改善

岐阜県 岐阜市立東長良中学校

岐阜市立東長良中学校には、生徒が主体的に授業や学習をつくり上げていく学校文化がある。生徒同士が学年を超えて切磋琢磨し合い、より良い学習のあり方を模索する中で、学習への意欲を高め、自律的な学習態度が育まれている。

●学習意欲の醸成

主体的な学びは 学習環境の改善から

岐阜市立東長良中学校では、授業の開始・終了のチャイムが鳴らない。15年前、生活委員会から「チャイムが鳴ってから動くのでは受け身ではないか」「時計がなくても動けるようになりたい」という提案があり、生徒と教師がチャイムの意義を考え、どうすればチャイムが鳴らなくても時間通りに行動できるようにするのかを話し合い、チャイムをやめた。後藤喜朗教頭は次のように説明する。

「生徒が教育課程に参画するのは、本校の伝統です。運動会の演目の多くも、生徒が発案したものが受け継がれています。生徒の声に耳を傾け、生徒と教師が意見を交わすことは、本校では当たり前のことです。生徒に任せられる部分は任せ、共に学校を築いていくという校風が根付いています」

授業も、生徒と教師が共につくり上げていくという意識が定着している。学級目標の他に、学習目標をクラスごとに生徒が話し合っで決めている。生徒は積極的に授業に参画し、学び合いの場でも意見を述べ合い、互いを支え合う光景が日常的に見られる。

School Data

◎1988（昭和63）年開校。「共に自立をめざす生徒」を教育目標として、授業での学び合い、生徒と教師が共に学習活動の向上を図る「学習活動創造会」、学習シラバスの活用などを通して確かな学力の育成を目指す。



校長◎矢嶋英敏先生

生徒数◎ 621人 学級数◎ 19学級（うち特別支援学級2）

所在地◎〒502-0056 岐阜市長良真生町 3-27-4

TEL◎ 058-294-1782

URL◎ <http://cms.gifu-gifu.ed.jp/h-nagara-j/>

公開研究会◎ 2012年 11月 16日

同校は、25年前に長良中学校から分離独立して開校した。長良中時代から岐阜大教育学部の実習校に指定され、また、県内から派遣された教師の研修校として、教員養成の一端を担っている。しかし、あくまでも、学区内の生徒を受け入れる地域の公立校であり、生徒の家庭環境はさまざまで、学力は幅広い。そうした生徒が主体的に学びに参画する校風は、どのように培われてきたのか。

転機は、30年前、長良中学校での生活指導の改革にある。当時の校長が「環境が人をつくる」という信念の下に、校内美化を目標に生活指導に力を入れた。当初は生徒が積極的

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

に動くことはなく、教師が率先垂範で放課後に自ら教室を片付けていた。当時、担任として勤務していた矢嶋英敏校長はこう振り返る。

「全国的に生徒の荒れが問題となっていた時代で、本校も落ち着いた状況ではありませんでした。そうした中で、見た目を美しく整え、落ち着きのある環境をつくるのが、生徒が学びに向かう土台になると考え、生活指導に力を入れました。『見た目を美しく』は、目標として誰にも分かりやすく、結果が見えやすいという利点があります。指導は『型』から入りましたが、自分たちの活動によって学校が少しずつきれいになったことで、生徒は達成感を抱くようになりました。1つ出来たことが自信となり、更に良いものを求めて周囲に働き掛け、次の改善をする。この積み重ねによって生徒と教師の信頼関係が築かれ、本校の校風が生まれたのだと思います」

その校風が長良中学校から独立後も、同校に受け継がれてきた。今も生活指導は生徒が落ち着いて学習に向かう基盤となっている。

●生徒による学級の学習法改善 授業を他学級・他学年に公開し 学習の仕方を学び合う

生徒は具体的にどのように授業に参画しているのだろうか。同校では授業を「学習活動」と呼ぶ。教師が生徒に「業を授ける」だけでなく、生徒と教師が「共に築き上げていく」

という思いが込められている。

「本校の教育目標は『共に自立を目指す生徒』であり、教科の研究主題を始め、あらゆる教育活動の基盤になっています。生涯学習続けられる人を育てるのが我々の使命であり、生徒が目指す姿でもあります」(後藤教頭)

その姿勢が最もよく表れている取り組みが、「学習活動創造会」だ。1～3年生の全学級の代表が集まり、各学級の学習に関する取り組みを共有する場である。15年前、1年生が「先輩の学習を見てみたい」と、アンケートの中で授業見学を申し出たのが始まりだった。同校では学習活動に生徒の意見を取り入れるのは初めてだったが、共に何でもやってみようという意識や生徒との信頼関係を大切にしたいという思いから、学校全体で取り組むことにした。教務主任の山口政有先生は次のように話す。

「シラバスには各教科の学習法や学び合いの進め方が書いてありますが、それだけでは生徒が自ら学習に向かう態度を養い、学習法を身に付けるのは難しいものです。先輩の取り組みを間近に見て、驚いて、感動し、こういう方法があったのか、こうすればもっとよくなるという気付きから、学習に向かう態度が育まれ、学習法が自分のものとなるのです」

学習活動創造会は次のように進める。まず、年5回、それぞれ1学級が授業や学活を公開する全校研究会(全研)を開く。そ



岐阜市立東長良中学校校長 矢嶋英敏 やしま・ひでとし
「自ら率先垂範を示すことで、より質の高い教育を目指す学校風土を醸成していきたい」



岐阜市立東長良中学校教頭 後藤喜朗 ごとう・よしろう
「教師自身も自立した学習者として、共に学び合い高め合う職員集団をつかっていきたい」



岐阜市立東長良中学校 山口政有 やまぐち・まさとも
教務主任。国語科担当。「生徒の喜びを自分の喜びとして感じ、常に情熱を持って生徒と接していきたい」

れを、各学級の学習委員と当該教科の学習係(社会の授業なら社会科学係、学活なら進路委員)の2人が参観する。

全研の前後には、学級の代表が集まり学習活動創造会を開き、情報を共有する。

事前の「学習活動創造会Ⅰ」では、全研の参加者が一堂に会し、全研での目標や抱負を語り合う。公開授業を担当する学級の代表は、学級のこれまでの学習活動を発表し、公開授業の見どころを紹介する。各学級の代表は、その取り組みについて質問したり、自分の学級の課題を発表したりする。

2012年9月の学活の全研に向けた学習活動創造会Ⅰでは、見学する2年生から「学活は普通の授業に比べて挙手が少ない。学活を公開する2年1組が、どのような声掛けや

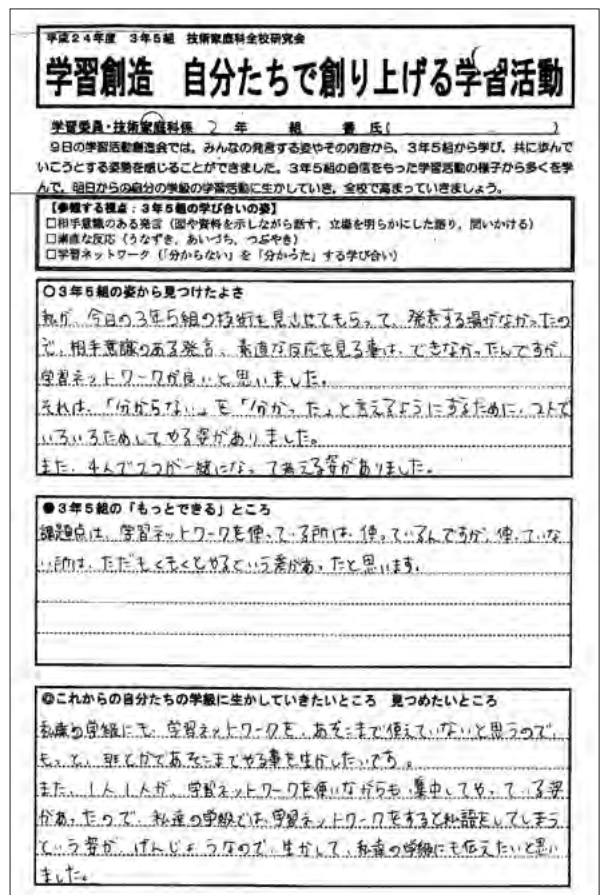


写真1 学習活動創造会の様子。この日は、学活の全校研究会に向けた話し合いがなされていた。司会の生徒の呼び掛けに、各学級の代表は一齐に挙手をして、意見を述べていた

進め方をしているのか参考にしたい」という抱負が述べられた(写真1)。

全研終了後には、参観した生徒がそこで得たこと(図1)を、プリントにまとめて配ったり、模造紙に書いて教室の壁に貼ったりして、各学級の活動に生かす。学び合いを活発にするためのうなずきの方法、挙手を促すために分かりやすく話す工夫、友だちを支援するために相手意識を持つことなど、学級の学習活動を向上するためにはどうすれば良いのか、他学級の授業の様子を見て、自分の学級に生かせる方法や工夫を盛り込み、共有する。その後、再び学級の代表が集まり、「学習活動創造会Ⅱ」を実施する。全研から何を学

図1 学習活動創造会 全校研究会で学んだこと



全校研究会で参観した授業についてまとめる。上記は、3年5組が公開した技術・家庭科の授業を見て、2年生の生徒がまとめたもの。自分のクラスの様子と比べて、改善点を述べている
*同校の資料をそのまま掲載

び、どのように学級に広めたのかを発表し、

会後にはその内容も全学級で共有する。昨年は「A組のような交流を取り入れたら、学習活動が楽しくなった」と発言があったという。

取り組みは生徒主導で進めるが、要所は教師がチェックする。例えば、9月の学習活動創造会Ⅰでは、会の最後に改めて担当の教師から、今回の全研の意義や参加者の心構えが確認された。また、プリントや掲示物を作る前には、必ず当該教科の教科担任や学級担任が見て、必要なことが盛り込まれているかどうかを確認している。

「生徒に全て任せているようで、肝心のところでは教師が手を掛けています。生徒の主体性を引き出しながら、教師がさりげなく支

援することがポイントです」(山口先生)

学級の学習活動の質を高めていく手立てを自ら考えることで、生徒は学習の主体がほかならぬ自分自身であることに気付く。それが主体的に授業に参加する意欲を育み、自律的に学ぶ力を高めていくのである。

● シラバスの工夫

発話の基になる思考法を盛り込み 根拠や理由の重要性を意識させる

具体的な学習スキルを高める手立てとして、06年度からシラバスを作成している。各教科の学習の仕方や上手な学び合いの方法、評価の観点など、生徒の自律的な学びに向けて、学習スキルを伝達するのがねらいである。

「自律的な学習者」を育てる学び方指導

特に重視するのが、学び合いを円滑に行うための力だ。「自分の考えや思ったことを発表する時」「理由を述べる時」など、場面に応じて、さまざまな話し方を紹介し、コミュニケーション力の向上を図っている。

更に、発話の基になる思考法を紹介。「以前の学習と比較する」「他教科で学習したことを活かす」など具体例を示した。実際に学び合いで使うことで、生徒が学んだことを関連付けたり、根拠や理由が重要であることを意識させるねらいもある。

シラバスは、年度当初に配布して説明するだけになってしまっている学校もあるが、同校では普段の授業でも、「今日の学習はシラバスに書いてある力を付けるためのものだよ」「今のA君の発言は良かった。シラバスのここに違う表現が書いてあるから使えるようにしよう」など、折に触れて教師がシラバスと関連付けて価値付けし、生徒にシラバスの存在を意識させるようにしている。教科書やノートと一緒にシラバスを机の上に常備している生徒は多く、発言形式を参考にしながら行う言語活動などで効果を発揮しているという。

●学び合いでの工夫①

「分からない」と言える集団にして
間違いから学べるハンドを実感させる

同校では、1993年度から学び合いに重

点を置いて授業を行っているが、生徒のアンケート結果によって、学び合いを通して学習が「よく分かる」「分かる」と答えた生徒が8割に達する一方で、「分からない」と答えた生徒も15%おり、分からないことを友だちに伝えられた生徒は3割弱にとどまっていたことが分かった。出来る生徒が学習意欲を高め、学び方を身に付けている一方、自分の考えを持ってないまま、取り残されている生徒も一定数いることが明らかになった。

同校では、全ての生徒が学ぶ喜びを実感するためには、学び合いの土台となる基礎・基本の定着が不可欠であるという仮説を立て、11年度から「基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着」をテーマに研究を始めた。

第一に意識したのは、学習集団づくりの強化だ。「学び合いの活性化には、分からないことを『分からない』と言いつける集団であることが重要です。生徒が『失敗しても大丈夫』と思える雰囲気づくりも、学力向上に欠かせない要素だと考えます」(山口先生)

シラバスに学び合いでの方針を示すと共に(図2)、学

図2 シラバスでの「学び合い」の方針

全員が「分かる」学習活動をめざす!

“分かったつもり”から抜け出す
学習活動をめざす!

“分からない”なら“分からない”
と仲間にヒントを求める!

「分かった」の基準を明らかにする!

「10」のことを説明したら、学級全員が「10」を分かることが基準

◎自分の考えが通じなかったり、「何となく」と言われたら、自分の考えのどこかに課題があります。

解決策

自分の考えをできるだけ分かりやすく簡潔に話そうと整理してみましょう。メモや図にして整理してみる!

分かる

同じにする

伝えられる

分かりやすさには、人の心を動かす力がある!

習以外の場面でも仲間づくりを意識。学び合いでの席順も配慮し、「分からない」と意思表示をしやすい工夫をした。また、これまでも学級ごとに挙手時のハンドサインを決めていたが(質問、考え中など)、11年度から「分からない」のサインも決め、授業が分からない時に活用するよう、生徒に呼び掛けた。これにより、授業で「分からない」と意思表示する生徒が増え、教える側の生徒にも「出来るだけ分かりやすく説明しよう」という意識が芽生え始めていると、山口先生は指摘する。

*同校の資料を基に編集部で作成

「いざ他人に教えようとするとうまく教えられず、実は理解していなかったことに気付く生徒もいます。学習において、間違いや失敗から学ぶことは重要であると、生徒は気付くのです。分からないと言えることは、その生徒が理解できるようになるだけでなく、教えた生徒が更に深い理解を得られる2つの利点があります」

● 学び合いでの工夫②

生徒の思考プロセスに合わせた単元構成を工夫

学習指導計画の見直しにも着手した。この時間は基礎・基本の定着に重点を置いて指導し、次の時間では前時での知識を基に学び合いを行うというように、生徒の思考過程に沿った学習の並びになるよう、単元構成の見直しを図った。

国語を例に説明すると、以前は、取り上げた作品を貫く課題の確認や登場人物の整理などを行って作品全体の見通しを持たせたら、すぐに学び合いに入っていた。しかし、それは作品に関する基礎知識がない生徒には学び合いが難しく、基礎知識を持っている一部の生徒だけで学び合いが進んでしまっていた。そこで、11年度からの指導計画では、例えば最初の2時間で社会背景を学び、情景描写に着目する力を付け、作品理解のための基礎知識の定着を行った上で学び合いに入り、主人



写真2 1年生の国語の授業での学び合いの様子。文章が「推敲」された過程に着目し、文章の論理構成について考える課題に取り組んだ

公の心情の読み取りを行うようにした。

更に、学び合いの前に自分の考えを書く時間を設けるようにした。自分の考えをまとめることで、背景知識をきちんと理解できているか、どこが理解できていないのかを自ら明らかにするのである。教師は机間指導などで一人ひとりの理解度を確認し、理解が不足している生徒を個別に支援している(写真2)。

● 自主学習の工夫

家庭学習計画をグループで立て計画を遂行する力を付ける

自主学習と家庭学習の充実も、取り組みの

柱の1つである。

定期考査の2週間前からは、帰りの会の後に数回の「チャレンジの時間」を設ける。自分の弱点や伸ばしたい教科を学び直す自習の時間だ。1回45分、前半30分は1人で取り組み、残りは友だち同士で教え合う。全校一斉でも2、3回実施し、教科担当が持ち回りで各学級を回り、生徒の質問にに応じている。クラスによっては、教科係の生徒が作成した模擬テストに取り組み、分からない生徒に教えることもある。

家庭学習の充実のために活用しているのが「学習予定帳」だ(図3)。毎日の学習計画と達成状況を記入する生活記録で、朝の班会議において生徒が家庭学習の状況を報告し合い、仲間からアドバイスをもらう。宿題以外に、どのように家庭学習をすれば良いのかわからない生徒でも、友だちの学習法を知って取り入れることが出来る。

教師にとっては、生徒把握やコミュニケーションのツールのにもなる。その日の感想などを書かせることによって、生徒の日常の状態を把握し、学習内容や学習行動での気付きを見て、意思表示が苦手な生徒には、「仲間が発言した後の挙手を出来るようになるというです」などのアドバイスをする。

定期考査前には、学習予定帳を活用し、帰りの会で帰宅後に取り組む自習の予定を立て、班内で学習時間や内容を確認する。班に

